

水辺の話題

国際フォーラム「川が変わる」- 子ども達に手渡せる川をめざして - 開催の案内

日本における健全で持続可能な河川管理の方向性を探ることを目的として、河川環境の保全と再自然化に実際に携わっている欧米の担当者を講師として招聘し各国の実状について講演していただく、国際フォーラム「川が変わる」が開催されます。(財)リバーフロント整備センターではこのフォーラムの後援をすることにいたしましたので、以下にその概要を紹介いたします。

1. フォーラムの概要

会議名称：「川が変わる」- 子ども達に手渡せる川をめざして -

会議テーマ：健全で持続可能な河川管理

開催年月日：平成10年10月28日(水)10時~18時

開催場所：津田ホール(東京都渋谷区千駄ヶ谷)

参加対象：国・地方自治体の行政職員、民間団体、市民、企業

参加登録料：無料(ただし、懇親会は有料)。参加には事前登録が必要。

申込み締切：平成10年10月20日

申込み方法：下記の事項を明記の上、ハガキまたはFAXにてお申し込みください。

1) 氏名 2) 所属 3) 連絡事務所

4) TEL/FAX番号 5) 懇親会参加の有無

2. プログラム

基調講演「生態系保全におけるこれからの川の役割」

池谷奉文(財団法人日本生態系協会会長)

講演1 「日本の河川の現況と環境保全への取り組み」
足立敏之(建設省河川局河川環境課建設専門官)

講演2 「21世紀に向けたアメリカの新しい河川管理」
ジム・ラブレス(米国ミズーリ州イーグル・ブラ
フス保全管理課長)

講演3 「氾濫原管理の一環として自然の流れをとりも
どすドイツの川」

カール・ローター(ドイツラインラント・プファ
ルツ州トリアー市環境農業局長)

総括 高橋裕(東京大学名誉教授)

懇親会 希望者のみ

3. 運営組織

主催：(財)日本生態系協会

後援：建設省、農林水産省、環境庁、国土庁、東京都、
(財)河川環境管理財団、日本ビオトープ管理
士会、(財)リバーフロント整備センター

問い合わせ先：(財)日本生態系協会国際フォーラム係
〒171-0014 東京都豊島区池袋2-11-9安藤ビル305
Tel 03-5951-0244 Fax 03-5951-2974

平成11年度「水辺施設」助成事業の募集について

財団法人リバーフロント整備センターでは、水辺の施設への助成を行っています。以下の要領で募集を行っておりますので、多数の応募をお待ちしております。

平成11年度「水辺施設」助成事業応募要領

1. 趣旨

良好な水辺空間形成の一環として、「アメニティ施設」又は「水辺自然環境施設」を設置し、水辺空間の快適性や豊かな自然環境が一層向上することと併せて水辺空間に対する一般の方々の関心と理解が深まることを目的として行うものです。

2. 実施機関

財団法人リバーフロント整備センター

3. 応募要件

(1) 応募資格：市町村

(2) 応募部門

A部門：「アメニティ施設」

ここでいうアメニティ施設とは、水辺空間整備事業に積極的に取り組んでいる地域のシンボル地区において、休憩所、修景、水飲場、サイン等の施設をいいます。

B部門：「水辺自然環境施設」

ここでいう水辺自然環境施設とは、水辺の自然環境の向上に取り組んでいる地域で、生物の生育場所の保全・復元・創出等のためのワンド、池、湿地、小川等の造成、植生の移植等の工事をいいます。

(3) 応募対象事業

河川事業(ダム事業及び砂防事業は除く)と一歩として整備し、又は整備を行う水辺空間等整備事業(ふるさとの川整備事業、桜づつみモデル事業、多自然型川づくり、ラブリバー制度等)

(4) 応募内容

応募内容は、部門別に市町村名、担当課名、担当者名、電話番号、水辺施設の応募部門、設置予定場所、河川名及び水辺施設の企画概要を記入し、設置周辺状況がわかる写真等を添付するものとする。応募様式は電話などで要請があればFAXにより送付いたします。

(5) 応募締切り

平成10年12月25日(金)

(6) 選定委員会と選定

学識経験者、建設省担当官等からなる選定委員会に諮り選定します。

(7) 選定数

A部門の「アメニティ施設」：1カ所

B部門の「水辺自然環境施設」：1カ所

(8) 選定発表

平成11年4月に選定発表を行います。選定市町村に通知するとともに、当センター広報誌「RIVER FRONT」などに発表いたします。

4. 応募上の注意

「アメニティ施設」は、製作・設置費込みで9,000千円/カ所、「水辺自然環境施設」は設計・工事費込みで4,500千円/カ所とします。

の施設は、当センターが平成11年度に設置し、施設が完成後に市町村に寄贈します。

5. 応募及び問い合わせ先

財団法人リバーフロント整備センター

「水辺環境」事務局

業務部 渡辺(康示) 長張、中村

〒102-0075 東京都千代田区三番町3-8泉館三番町3F

TEL 03-3265-7121 FAX 03-3265-7456

河川の自然復元に関する国際シンポジウム

去る5月26日(火)、27日(水)の2日間にわたり、東京虎ノ門のニッショーホールにて「河川の自然復元に関する国際シンポジウム」が開催されました。今回のシンポジウムの開催に際しては、河川整備基金からの助成を頂きました。また、建設省、環境庁等の各機関からはご後援を頂きました。主催は東京大学教授、玉井信行先生を代表とする実行委員会によるものです。リバーフロント整備センターは、事務局を担当致しました。当初の参加予定人数をはるかに越える方々に申し込みを頂き、620名を超える多くの方々に参加を頂きました。

近年の河川事業は、治水、利水のみならず自然環境に配慮した川づくりが望まれています。今回のシンポジウムは、河川の生態系の動的な特性を明らかにしそれに基づく自然回復の理念を導き、今後の河川整備の技術的な基盤を構築すること、そして広く河川に関わる研究者、技術者、行政の方に議論の場を提供することを目的に開催しました。今回、河川工学、生態学、自然保全等の専門家を国内外より広く招き、ご講演をお願いしました。シンポジウムは、2日間にわたりテーマごとに6つのセッションを設け、セッションごとに基調講演と一般講演を行いました。基調講演には、東京大学教授の玉井信行先生、ドイツより植生を専門とするノルベルト・ミュラー氏(ベルリン工科大学講師)、自然保護を専門とするハーラルト・ブラヒター氏(フィリップス大学教授)、アメリカより河川の自然復元を

専門とするF・ダグラス・シールズ・Jr氏(米国農務省国立堆積学研究所主任研究員)、フランスより自然地理学を専門とするジャン・ポール・ブラバル氏(ソルボンヌ大学教授)をお招きしました。各セッションごとに講演の後に、会場からの質疑応答を行い、河川の自然復元について活発な議論を行いました。

今回の国際シンポジウムを契機に、更に川づくりに携わる方々の交流が進み、河川の自然復元がより進むものと思われれます。



編集後記

残暑厳しい折りに校正作業をしていると、集中力が鈍ります。エアコンの効いた室内では、電話が邪魔します。世の編集者諸氏はどのようにされておられるのでしょうか。私は電車の中が一番快適です。

「舟運」に関する卓抜な論考を寄稿して頂いた。著者の気概が伝わるような原稿を頂いたときは、本当に嬉しい。そもそも我が国の河川事業の始まりにおいて、その目的は舟運と治水にあったことを思い出した。

平成2年度から始まった「河川水辺の国勢調査」もデータの蓄積に伴い、色々な検討が可能になりつつある。今回は、帰化生物分布とその在来種への影響に関する検討結果を掲載した。他にも貴重なデータが蓄積されており、何が出てくるか、びっくり箱では無いが、今後がとても楽しみです。

「汚濁された河川も水源まで辿れば清流が流れている。」「清流」とは何と清々しい言葉だろう。その具体的表現は千差万別。改めて圧縮された漢字の持つ表現力の豊かさと曖昧さを感じる。英語ではcrystal stream。何か即物的な感じがする。それとも英語を

母国語とする人たちにはもっと違ったイメージが湧くのだろうか。

海外調査は難しい。文化の違い、単純には言語の違いが障害になり、なかなか欲しい情報が得られない。以心伝心。熱意で綴るポー川づくりの報告。

自然共生研究所だより、日記魔人の水、万葉の川心。読者にはとても楽しみな、編集者には手抜きのできる連載コーナーです。継続は力なり。これからも応援をお願いいたします。著者への激励、感想等、大歓迎です。

前号から本誌の編集に携わるようになりました。誤字脱字は無いのが当然の世界。専門用語も知らなければ思いこみのミスが出る。読者に正確な情報をお届けするために完璧を期したはずなのに、あ~ここにもミスが！ 読者の「本誌を楽しみにしています」の便りに励まされ、今回は、いや今回もがんばった。どうぞ、今度こそ誤字脱字、あるいはほとんどないミス等ありませんように。

(I.T.)